

令和7年度総括と令和8年度計画

安寧社会を問いつける社会的共通資本としての
「産官学民連携の共創プラットフォーム」の実質化に向けて

定時社員総会説明資料

本資料の位置づけ

活動報告書

(別紙)

- ・18件の活動内容
- ・参加者数・日程
- ・活動の全体像
- ・実績の記録

決算書

(別紙)

- ・収入合計 642.97万円
- ・当期純収支 107.9万円
- ・手元資金・会費収入
- ・財務の記録

本資料

(総会での説明)

- ・初期アウトカム評価
- ・共創基盤の学び
- ・共創プラットフォームの3機能
- ・5年後・10年後の暫定アウトカム
- ・R8年度計画・予算案

活動報告書・決算書は別紙にて配布済みです。R7年度、AnCoはKANSAI MeetUp実行委員会に加盟し文化活動のウェルビーイング効果の見える化に取り組むとともに、複数企業と共同でHIAやロジックモデルのワークショップを実施しました。本資料は、その実践を通じて明らかになったことを整理したものです。

R7年度の位置づけ: 構想から「共創の実装」へ



※ 延べ参加者数は確認可能な範囲で把握できた人数のみを集計

R7年度の実践から見えたAnCoの核心機能 = 「言語化・翻訳・伴走」

文化活動のウェルビーイング評価、企業との共同WS等の実践を通じ、現場の価値や違和感を言語化し、評価の枠組みに翻訳し、事業・政策へ接続する機能がAnCoに求められていることが明らかになった

昨年度アドバイザーボードでいただいた主な指摘と対応

R7年度総括は、昨年度の宿題への応答として位置づける

昨年度の主な指摘	今回資料での対応
WHY・WHAT・VISIONが曖昧	R7年度の実践を起点に、AnCoの役割を共創プラットフォームの「作り方」と「評価の仕組み」として再整理
独自性が見えにくい	「言語化・翻訳・伴走」を中核機能として整理
ターゲット・相談ニーズが不明確	企業・自治体・文化・医療福祉等の相談類型と、評価以前の問いを整理。「相談ニーズ」を、顕在化した要望ではなく、違和感・関心・課題意識から共に問いを立てるプロセスとして再定義
専従人材・資金運用が課題	R8予算案、新会員制度、専従化判断基準、中長期計画に反映
AnCoジャーニー（共創基盤形成プロセス）が見えにくい	初期アウトカム評価として、共創基盤の形成過程を整理
10年後のビジョンが未整理	5年後・10年後の到達状態を暫定提示。具体的ビジョンは今年度中に検討

R7年度は、理念を再掲するだけでなく、実践を通じてAnCoの役割を検証した年度である。その結果、AnCoの核心機能として「言語化・翻訳・伴走」が見え、共創プラットフォームを3つの機能として捉え直す必要性が明らかになった。

R7年度の総括:実践を通じて明らかになった共創プラットフォームの課題

R7年度は、AnCoが「現場の価値を共創可能な問いへ翻訳するプラットフォーム」としての輪郭が見え始めた年度であった。

R7年度、AnCoはKANSAI MeetUp実行委員会への参画を通じて、文化活動のウェルビーイング効果の見える化に取り組んだ。

複数企業と共同で実施したHIA(健康影響予測評価)・社会的インパクト評価に基づくロジックモデル作成ワークショップは、単なる評価作業ではなく、関係者間で価値・課題・評価対象を共有し、共創プラットフォームを形成するための問いの言語化・整理工程として機能したと言える。

特に重要なのは、AnCoが扱う対象が、医療・福祉起点の介入ではなく、文化・地域活動・企業活動等、健康を直接目的としない活動の潜在的価値の可視化に広がっている点である。

一方で、共創には「目指す社会像」「評価対象」「役割分担」「問いの言語化・整理工程」の共有が不可欠であり、その前提条件が未整理であったことも顕在化した。

R7年度の相談を通じて見えてきた問いと事業化上の課題

相談内容の類型	見えてきた問い
文化・体験活動の価値評価	文化体験が参加者の情動、他者との関係性、社会参加の可能性にどのような変化をもたらすか調査し、どのような評価設計に落とし込むか
食・栄養・まちづくり	従来の栄養概念を拡張し、地域や事業の社会的価値にどう接続するか
空間・建築・環境	継続的な空間体験がウェルビーイングや行動変容にどう影響するか
医療・福祉・自治体施策	健康アウトカムや社会的効果をどう評価し、説明・改善に活かすか
企業活動・商品・サービス	社会的価値が、最終的に事業継続・収益性にどう結びつくか

R7の学び: AnCoの評価支援は「健康によいことの証明」にとどまらず、活動の社会的価値を、企業・自治体・医療福祉それぞれの継続条件に応じて翻訳する必要がある。

これらの相談の背景には、「そもそもアウトカム評価とは何か」「評価してみたが、機序が説明できない」「社会的価値が事業収益に接続しない」「定量化により活動本来の魅力が損なわれるのではないか」という評価以前の問いがある。

初期アウトカム評価の枠組み

R7年度はAnCoが考える共創プラットフォームが機能し始めたかを把握する「初期アウトカム評価」として位置づける

	アウトカム	評価する変化	R7年度評価
1	共創プラットフォームに含まれる機能の再整理	AnCo自身が、共創プラットフォームに必要な機能・前提条件を明確化できたか	課題の顕在化
2	課題・関心の言語化	企業等の課題が言語化されたか	明確化が進んだ
3	評価可能な問いへの翻訳	語りがロジックモデル・指標に接続したか	複数案件で試行
4	共創案件の形成	対話がR8案件・受託・共同研究へ接続したか	一部で形成
5	組織課題の可視化	会員制度、財務、調査研究受託等の課題が整理されたか	主要論点として顕在化

※ 定量的指標(案件化率、会員化率等)の管理体制はR8年度に整備予定

令和7年度 実践事例

効果測定を超えた「言語化・翻訳」の必要性が
顕在化した3つの実践事例

関西広域連合 / PLT「栄養のあるまち」 / DNP みどころウォーク® / 共通課題の整理

R7実践事例 ① | 関西広域連合事業

文化活動のウェルビーイング向上効果の見える化

取り組みと課題

- 職場での絵画の展示と「対話型絵画鑑賞」の実施や、評価実践「ようこそ絵本の音楽会へ」を対象に、文化活動の健康影響を予測・可視化した。
- ウェルビーイング(WB)向上の可能性は見えたが、公共空間や職場での絵画の作品設置では不十分。過去の文化経験、対話を促す空間、参加者間の関係性が重なってWB向上に寄与する可能性が浮上。



AnCoの論点と今後

文化活動を、「文化経験の連鎖・継承×空間デザイン×社会関係資本形成」のプロセスとして捉え、「文化経験が社会参加や関係性形成につながる条件」を含めた機序を明らかにする必要がある。

- 今年度は連合事業ではなく、京都府事業として継続予定

文化の効果は、作品単体ではなく、経験・空間・対話の連鎖から生まれる。

※「対話型絵画鑑賞」は絵画をみながら、自由に思ったことを話す取り組み。KANSAI MeetUp実行委員会と協働で実施。

※「ようこそ絵本の音楽会へ」は音楽と絵本の鑑賞を通じた多世代交流の取り組み。KANSAI MeetUp実行委員会と協働で実施。

R7実践事例 ② | PLT

「栄養のあるまち」のロジックモデル化

取り組みと課題

「栄養のあるまち」を栄養学的・身体指標的な評価だけでは、まちや人々を元気にする活動、関係性、循環の価値が見えにくいことから、対話型鑑賞とナラティブを用いた定義拡張WSを実施し、議論をロジックモデルとして整理した。



AnCoの論点と今後

「栄養」を食・身体指標に閉じず、参加・関係性・地域循環を生み出す社会的プロセスへ拡張して表現する。

- その後、PLT側の事業方針変更等もあり、継続的な共同実践には至らなかった。一方で、本実践を通じ、共創における時間軸や期待値調整、評価以前の共通認識形成の重要性が明らかになった。

栄養を「食」から「まちを元気にする循環」へ。

※PLT(株式会社プライムライフテクノロジーズ)との共同WS。模造紙・付箋を用いた「2036年の栄養のあるまち」可視化セッションを実施

R7実践事例 ③ | DNP

みどころウォーク®の社会的インパクト整理

取り組みと課題

- XR体験を題材に、演劇的手法を用いて体験の意味づけや社会的価値を探索した。
- 生理学的効果は測定できても、それがどのような社会的インパクトを生み、なぜ導入する価値があるのかを説明しにくい。



AnCoの論点と今後

身体的反応や驚きを、意味づけ・対話・社会的定着へとつなぐ価値形成プロセスとして整理する。

- 今年度継続で協議中
- 今回、得られた知見をベースにロジックモデルの精緻化を予定

体験の効果は、生理反応単体ではなく、意味づけ・対話・社会的定着の連鎖から生まれる。

※DNP(大日本印刷)との共同検討。みどころウォーク®はXR技術を活用した体験プロダクト。

R7実践事例 ④ | A10ラボ

A10ラボ・千葉大学の共同研究の論文が公表(千葉大WACOからの継続)

取り組みと課題

- 千葉大学とA10ラボとの産学連携・共同研究の論文の公表
- 高齢者向けスマートフォン講座に、仲間同士で励まし合うデジタルピアサポートアプリを組み合わせ、日常の歩行量への効果を検証した



AnCoの論点と今後

- 企業の技術やサービスを、地域課題の解決、評価設計、共同研究、論文化へつなぐ産学連携モデルとして整理
- 企業との共創を、エビデンス創出と社会実装へ接続する事例として展開可能

産学連携の成果は、企業技術と地域課題をつなぎ、評価・論文化・社会実装の連鎖から生まれる

※A10ラボ、千葉大学との共同研究。成果は2026年3月10日に Journal of Medical Internet Research に掲載。

https://www.cn.chiba-u.jp/news/260325_2/

R7年度に顕在化した共通課題：効果測定から価値形成の機序へ

事例	共通して見えてきたこと
関西広域連合事業(文化活動)	ウェルビーイング向上の可能性はあるが、機序(メカニズム)が不明。作品単体ではなく、経験・空間・関係性が重なる「文化経験が社会参加や関係性形成につながる条件」の整理が必要。
PLT(栄養)	栄養学的評価だけでは「まちを元気にする活動」が見えない。関係性・参加・循環を表現する新しい手法が必要。
DNP(XR体験)	生理学的効果だけでは事業導入理由を説明できない。体験が社会的価値へ変わるプロセスの整理が必要。前提として、企業側の思いを可視化する必要。

R7の学び: AnCoの評価支援は、単に「効果があるか」を測るのではない。現場の語りや違和感を受け止め、「なぜ効くのか」「どのような価値が形成されるのか」「どうすれば事業・政策に接続できるのか」を整理する言語化・翻訳・伴走である。

R7年度の3事例は、いずれも医療・福祉起点ではなく、文化・栄養・体験という「健康を直接目的としない活動」の社会的価値の可視化に取り組んだ点で共通する。

R7年度の気づきとR8年度に向けて

共創プラットフォームを機能させるには、共通認識と共通基盤が前提である

共通認識

目指すべき社会像の共有がなければ、評価対象やアウトカムの合意形成も困難。R7の分科会・セミナー・WSは、この言語の擦り合わせ過程だった。

共通基盤

会員制度、知財管理、NDA、担当分離、標準テンプレート—これらは「場のインフラ」であり、R7ではその整備途上であった。

共創の場づくり

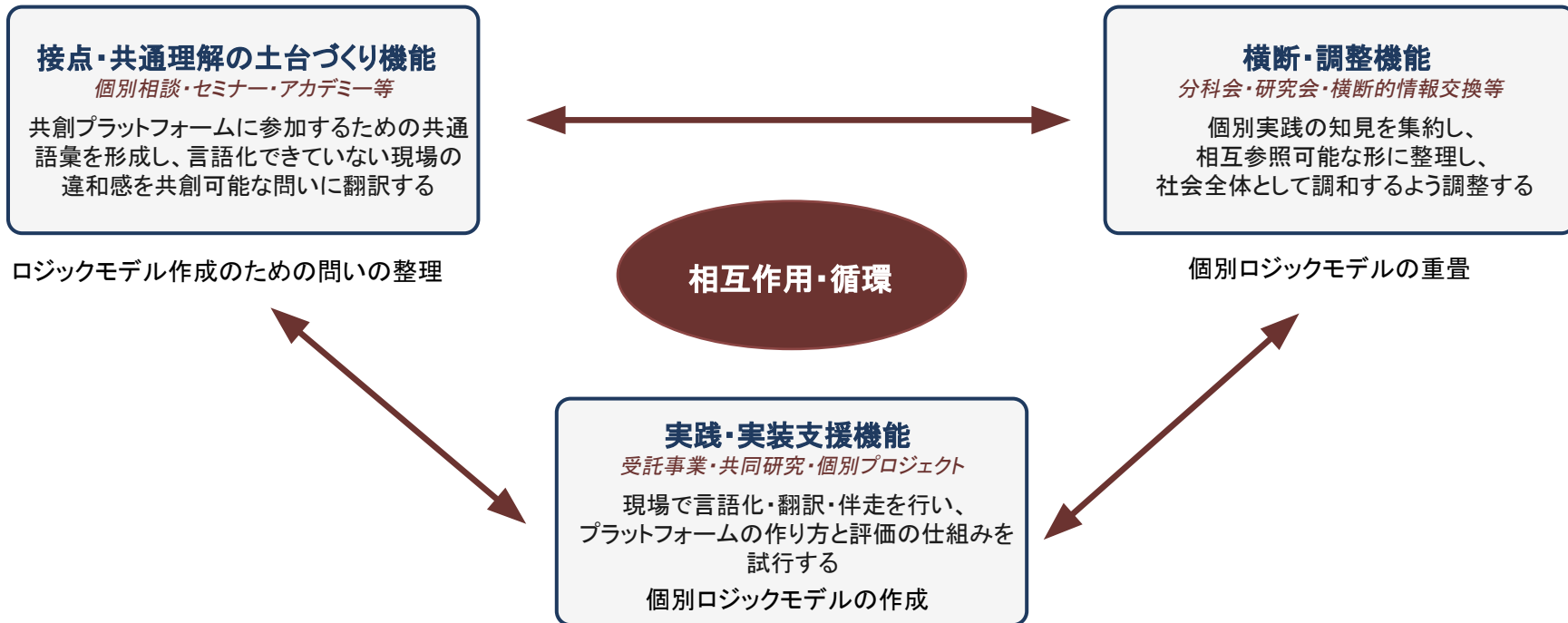
個別WSだけでなく、多様な主体が参加できる共創の場を意識的に設計する必要がある。案件化以前の「場」が信頼の土壌になる。

R7年度の実践を踏まえると、共創プラットフォームは物理的な場ではなく、「接点・共通理解の土台づくり」、「実践・実装支援」、「横断・調整」という複数の機能が連動して初めて機能するものとして捉える必要がある。

以上の学びを踏まえ、以下のスライドで共創プラットフォームの3機能、5年後・10年後の到達状態、R8年度方針をご説明します。

共創プラットフォームに含まれる3つの機能

3機能の連動と循環で、共創プラットフォームは初めて機能する



3つの機能は相互に独立しているのではなく、現場の問い・実践の知見・全体の調整が循環することで、共創プラットフォームは持続的に機能する。

R8年度アドバイザーリーボードでいただいた主な指摘と対応

2026年5月15日(金)に実施

主な助言	R8年度の対応方針
安寧社会のビジョンを明確にする	安寧社会の定義、AnCoの役割、10年後の到達像を具体化する
生活者・当事者に届く言葉にする	専門用語を整理し、会員・地域・当事者に伝わる表現へ置き換える
小さな実践からビジョンを育てる	子どもの社会的処方、文化事業、健康まちづくり等の実践を通じて方法論を磨く
地域ごとの実践と全国的知見をつなぐ	地域ランチやテーマ別プロジェクトのあり方を検討する
共創プラットフォームの場を強化する	セミナー、分科会、勉強会、アドバイザー交流などを定期的実施する
持続可能な運営体制を整える	会員制度、受託事業、自治体連携、外部資金を組み合わせた収益構造を検討する

令和8年度計画

共創プラットフォームを実現するための
制度・財務・体制の整備

新会員制度 / R8予算案 / 専従化判断基準 / 中長期計画

R8年度方針：令和8年度に強化するAnCoの4つの役割

区分	区分の説明	令和8年度の主な取り組み
コミュニティ形成	多様な人や組織が出会い、学び合い、新たな活動や協働のきっかけを生み出す	新会員制度の運用、AnCoアカデミー、セミナー開催、会員交流会、理事との意見交換、地域ランチの検討・形成
プロジェクト創出・実践	社会課題や現場の問いをもとに、プロジェクトを企画・実施し、その成果を社会へ還元する	子どもの社会的処方プロジェクト、京都府「文化の心継承事業」、園芸博関連構想、JANPIA関連事業、行政・企業等との受託事業
伴走・調整	プロジェクトや連携の立ち上げから実装までを支援し、多様な主体をつなぎながら、知見の整理・共有を行う	事務局相談、健康まちづくりロジックモデルワークショップ、分科会運営、アドバイザーボード運営、会員・団体間のマッチング支援、異分野連携のコーディネート、ロジックモデル作成支援、評価設計支援、実践知の整理と方法論化
組織基盤強化	AnCoの活動を持続的に支えるための運営基盤を整える	事務局体制の強化、相談・連携支援の仕組みづくり、安心して相談・共創できるルール整備、プロジェクト管理の仕組みづくり、会員制度の運営・改善、財源の多様化(会費・受託事業・助成金等)

R8年度方針:3つの機能を連動させる

R8年度の重点	内容
接点・共通理解の土台づくり	新会員制度による個別相談、あんこアカデミー、セミナー等を通じて、共通語彙と参加導線を整備する
実践・実装支援機能の標準化	受託事業・個別WSを通じて、言語化・翻訳・伴走の方法論を理論化する
横断・調整機能の再設計	分科会や横断的情報交換を、実践知の集約・相互学習・連関・調整の場として設計する (実践事例がある程度取り組まれていることが前提)
組織基盤の整備	専従化やNDA、知財管理に加え、相談受付、ヒアリング、ロジックモデル、HIA(健康影響予測評価)、ワークショップ設計、振り返り等の各種様式を整備。

R8年度に受託事業を重視する理由は、単なる収益確保のためではなく、先進的な個別実践を通じて、安寧社会を共創するためのプラットフォームの作り方と評価の仕組みを確立し、その知見を分科会・セミナー・会員相談へ還流させるため。

新会員制度の位置づけ: 相談と対話の入口づくり

単なる会費制度ではなく、相談から共創へ接続する入口を整える

- 1 規模別区分 → サービスレベル別区分** 会員が目的に応じてAnCoとの関わり方を選択できる
- 2 個別相談の制度化** 形式知化以前の問いを受け止め、課題・関心を評価可能な問いへ翻訳する
- 3 相談回数・申込方法の明確化** 属人的対応から、再現可能な共創支援プロセスへ移行する
- 4 分科会・セミナー・共同企画・受託へ接続** 単発相談を、共創プロジェクト形成と実践知の還流につなげる
- 5 会費400万円を保守計上** 共創基盤を支える固定収入を確保する

R8年度の位置づけ: 会員制度を、会費徴収の仕組みから、共創プラットフォームの実質化を促進する仕組みへ転換する初年度。※NPO・非営利団体等の会員種別については、自治体・賛助会員等との位置づけを踏まえ、今年度中に整理予定。

R8重点プロジェクト:4領域での先進的個別実践

受託事業を通じて、共創プラットフォームの「作り方」と「評価の仕組み」を確立する

【確定】

1 子どもの社会的処方プロジェクト(自主)

孤独・孤立化する未成年、既存の支援制度からこぼれ落ちやすい子ども・若者への取り組みのアウトカム評価と活動の社会的処方化。子どものウェルビーイングの測定と現場ナラティブを統合。

2 京都府『文化の心継承事業』(受託)

花道・茶道の社会的インパクト評価。初体験・継続・普及段階ごとに変化(時空間の広がりによる効果を予測)を可視化し、ロジックモデルと評価手法を検討。

【未定】

3 園芸博関連構想(協議中)

花文化・自然との関わりの社会的インパクト評価。情動・時間感覚・社会参加への影響を整理し地域WBとの接続を検討。

4 JANPIA関連事業(7月公募)

休眠預金活用事業の評価支援。NPO等の評価を監査ではなく改善・伴走プロセスとして整理し、活動価値の言語化を支援。

4プロジェクトに共通するのは、健康を直接目的としない活動の社会的価値を、「どのような条件で価値が発動するのか」という観点から整理し、共創プラットフォームの方法論へ接続することである。これは「効果測定」ではなく、共創プラットフォームの方法論化に直結する実践である。

R8年度の具体計画:時系列ロードマップ

R7の知見を、制度・事業・発信・財務基盤へ変換する年度

時期	区分	主な計画	位置づけ
5月	国際発信	ISPC 2026(京都大学)AnCoブース出展	国際発信・会員獲得導線
6月	制度	定時社員総会・新会員制度決議	サービスレベル別会員制度の正式承認・6月17日適用開始
6月～ 2-3回予定	共創	健康まちづくりロジックモデルワークショップ	健康まちづくりの価値を可視化し、評価手法と共創テーマの形成につなげる
7月	発信	健康まちづくり 2026	企業・団体との接点形成
通年	共創	子どもの社会的処方プロジェクト等	多主体が参加する共創の場づくり・共通基盤の実践
通年	事業	セミナー・分科会の開催、行政・企業などの受託事業	方法論テンプレート化・案件台帳整備・入口商品設計
通年	財務	資金源の多角化	助成金・外部資金の申請検討

R8の課題 = 新しい理念を増やすことではなく、R7の知見を制度・商品・KPI・人員配置へ変換すること。

社会的価値の共創基盤化へのロードマップ

R7の実践知を方法論化し、10年後の社会インフラへ展開する

R7(実践知の蓄積)

3つの実践事例から
「翻訳」の必要性が顕在化

R8-R10(方法論化)

領域別モデル整備
共創プラットフォームの強化

10年後(社会基盤化)

評価・翻訳・接続が
自律的に行われる社会へ

R7の学びの核心

3事例(関西広域連合・PLT・DNP)に共通したのは、「効果があるか」ではなく

「どのような条件で・どう価値が形成されるか」という機序の問い。

AnCoは、この機序の言語化と翻訳を担う言語化・翻訳・伴走機関である。

現場の「点」を繋ぎ、価値が循環する社会の「基盤」を作る。R7で見えた機序を、R8-R10で方法論化し、10年後に社会インフラとして根付かせる。

5年後・10年後の暫定アウトカム構造

時点	到達状態
5年以内	個別実践を通じて、安寧社会を共創するためのプラットフォームの作り方と評価の仕組みを理論化し、現場に応じて修正・応用可能な方法論として確立する。
10年後	各地・各領域に、安寧社会とは何かを問い続け、実践していく共創プラットフォームができていく。
10年後の 具体像	HIA・SIE・ロジックモデル等が政策形成、事業設計、地域実践、企業活動の中に組み込まれ、健康を直接目的としない活動の潜在的価値を社会の中で機能として活かす共創プラットフォームができあがりつつある。
AnCoの 役割	実践知を集約し、相互参照可能な形に整理し、大学・評価機関等と接続することで、各地の実践を支える。各取り組みのロジックモデルを重畳し、安寧社会実現のための合意形成の場、調整の場を提供する。

具体的な10 Year Visionの言語化は、今年度のワークショップ、分科会、個別実践の振り返りを通じて検討する。

令和8年度予算(案)

共創プラットフォームを実現するための
制度・財務・体制の整備

新会員制度 / R8予算案 / 専従化判断基準 / 中長期計画

R8予算案: 基準予算と目標案

社保事業主負担分を反映した保守的な収支管理ライン

1,080万円

収入合計

1,076万円

支出合計

+4万円

当期純収支

項目	基準予算(現実案)	目標案(Target)	備考
収入合計	1,080.0万円	2,000.0万円	会費400+受託650+その他30
支出合計	1,076.0万円	1,792.0万円	社保事業主負担分を明示後も保守設計
当期純収支	+4.0万円	+208.0万円	保守的見込みでも黒字維持

基準予算は、現時点での保守的な収支管理ライン。目標案は、案件形成・会員移行の上振れを見込む営業目標として扱う。

※ 事務局長専従化に伴う社会保険料等の事業主負担分(約32万円)を管理費内に別途計上。

R8-R10中長期計画:組織確立から安定・発展へ

受託依存を相対的に下げ、会費収入で固定費を賄える体制へ

R8(組織確立)

収入 1,080万
支出 1,076万 / 収支 +4万

R9(基盤拡大)

収入 1,600万
支出 約1,520万 / 収支 +80万程度

R10(安定・発展)

収入 2,000万
支出 約1,880万 / 収支 +120万程度

項目	R8	R9	R10
受託事業収入	650万円	1,000万円	1,200万円
会費収入	400万円	550万円	750万円
その他収入	30万円	50万円	50万円
収入合計	1,080万円	1,600万円	2,000万円
会費比率	約37%	約34%	約38%
支出合計	1,076万円	約1,520万円	約1,880万円
当期純収支	+4万円	+80万円程度	+120万円程度

R8は組織確立の年度。R9・R10に向けて会費収入と受託収入の双方を拡大し、共創プラットフォームの持続可能性を高める。会費収入による基盤性を高めつつ、受託事業・共同実践・外部資金を組み合わせた持続可能な運営体制を目指す。